

入 試 制 度

共通第1次学力試験成績と、各大学が独自に行う第2次試験成績とを総合して入学者を決定するというのが、我が国の現行の国立大学入試制度の大枠である。この大枠の制度の範囲内で各大学では個別的に、推薦入学、特別入学（海外子女、社会人など）、学士入学、3年次編入学等々の制度をとり入れて具体的な入学者選抜を行っている。まだ、第2次試験科目の中に、面接、小論文、実技等々を含めたり、高校調査書を重視するなど、入学者選抜のためのより望ましい資料を得ようという努力も続けられている。

各大学では、これら現行の入試制度に直接・間接に関わる基礎的なことがらについて、昭和54年度の現行制度発足以来、継続的に調査研究を重ね成果を蓄積してきた。本年度もこの方向の地味な調査研究が続けられ、これまでの成果にもとづいて入学者選抜方法の具体的改善がなされた大学も多い。

推薦入学者、2次募集入学者等、入学者の各種属性に着目した追跡調査あるいはアンケート調査が行われる一方、入学辞退者に対する各種調査研究が行われた。また、面接試験の結果の

評価に関する研究、共通第1次学力試験の自己採点にまつわる問題も取りあげられた。さらに、高等学校教員の協力を得て、共通第1次学力試験の内容分析が試みられた。54年以来蓄積された入試データを系列的に調査研究することによって、現行制度の見直し、あるいは問題点を整理する作業を行った大学もある。

以上は現行入試制度の下での実態に則した調査研究であるが、大学入学試験に関する理念と制度の国際比較的調査研究が引き続き行われた。文部省科学研究費を交付されて昭和55年にスタートした本研究連絡協議会の第2プロジェクトは59年度に終了したが、その研究成果が59年度から60年度にかけて公表された。また、スイスのジュネーブに本部事務局をもつ国際バカロレアの最終資格試験問題についての研究が行われている。その他、特に海外の理工系大学の入学者選抜方法についての調査研究が行われた。これらの国際的視点に立った調査研究の成果は、我が国の大学入試制度の改善のための貴重な資料を提供するものと期待される。